

交野ヶ原の昔ばなし

「孝子鈴見と別子山

推古天皇の御代、鈴見(すずみ)という一人の若者が年老いた病気の母と一人で暮らしていました。ある日、交野の農家に出稼ぎに行つた帰りです。天の川の河原で五・六人の子供が一羽の鶴を殺そうとしていました。鈴見は可哀想に思い、なけなしの金を払い、その鶴を貰ひました。鈴見は、鶴の傷の手当をし、餌もあたえ、十日程の間に鶴はすっかり元気になつたので、鈴見は鶴を抱いて山へ行き、鶴を放してやりました。

その後「ノのとで美しい娘さんかやで来て」とかねた
しに、あなたのお母さんの看病をさせてください」と云つて、かい
がいしく病気の母親の看病を始めました。鈴見は、以前のようには
交野の里に働きに出られるようになり、稼いだ金は全部娘さんに
渡して、家事一切を切り盛りしてもらつことにしました。

最期をとげたのです。一人は、泣く泣く野辺の送りを済ませた後
仲睦まじい夫婦となりました。

やがて男の子が生まれました。つたときのことです。鈴見の妻はこの子をつれて、鶴を大空へ放した例の山の上へ登り、子供にこう云いました。

「お母さんは天上界にすむ天女なのです。一羽の鶴となつて飛んでいたところ、流れ矢に当たり子供達に捕らえられてしまい、お前のお父さんが命を助けてくださったの





「君たち「肝高（きむたか）い」生き方に
憧れないかモオ〜?」

「肝高」とは、沖縄の古い言葉で、「気高い」という意味なんだモノ。

江縄では地元の英雄、阿麻和利(あまわり)の生涯を描いた、「肝高の阿麻和利」という中高生が演じる現代版組踊があるんだモオ。全国的にも有名で、交野原でも6年前に上演されたモオ。

チケットは両日とも完売で、開場前からロビーやお客様で賑わっていて、舞台が始まる前からワクワクだったモオ。舞台が始まると前回までとは違った、セリフ劇でストーリーは進んでいったモオ。物語が盤、アテルイが家臣であるヒラテの助命を嘆願する際のセリフが印象的だったモオ。

「俺は、黄金でも土地の為でもない
蝦夷の心のために戦うのだ」

平安時代初期の東北開

は、日本版の「ゴールドラツ

「か、たとえ3年後半で」

う大事業を支えるための財政的基盤なども理由

うたのではなかモオ。アテルイ・モレは

「高い」生きかたをしたのではないかモノ。次の公演で見せてくれるであろう、「進化」が今さら樂しみだモノ。



「交野神宮寺ワインの誕生だモオ！」

皆さん、ワインつて、何からできてるか知つているモオく？

ワインは果物のぶどうを樽や甕で時間をかけて熟成させて作つているんだモオく。実は大阪はぶどうの生産量が日本で9番目に多いそ



です。私は、このご恩に報いるため、人間の娘になつて病氣のお婆さんにお仕えしたあと、お父さんと夫婦になつたのです。親子三人で仲良く暮らしたいのですが、天上界の掟で今日限りで帰らなければなりません。お母さんがいなくなつても、お父さんと一緒に幸せに暮らしておくれ」と云つて一羽の鶴となつて大空へ舞い上りました。子供は泣く泣く家に帰り鈴見に知らせました。「どうか、お母さんは天女だったのか」鈴見は涙を流し、我が子をひしと抱きしめました。

やがてこのお話は聖徳太子の耳に入り、孝行息子鈴見と天女の物語に感動されて、鈴見に地蔵尊をお授けになりました。鈴見はこのお地蔵様を大切におまつりしたところ、金持ちになり子供とともに幸せな生涯を送りました。

のちの人は天女が涙ながらに子供と別れを惜しんだその山を子別れの山、別子山と名付け、そこにあつた松の木を鈴見が松と呼ぶようになつたのです。別子山は、意賀美神社がある万年寺山の続きとして、近年まであつたのですが、昭和十五年の淀川築堤工事の際、この山を切り崩して大量の土砂を採つたため、惜しくもなくなつてしましました。また、別子山の近くに、鈴見の思い出のために世の人が「鈴見が松」と呼んでいた樹齡何百年もの松の大木があつたのですが、残念ながら枯れてしましました。そこで今、在りし日のその松に代わるものとして岡東公園の一角に松が植えられ、それには「鈴見が松」と書いた札がそえられています。

本文參考『欽定風土記』